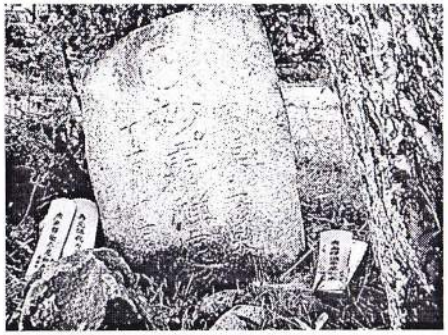
面瀬さがし　四

「面瀬地区の産金を探る。」

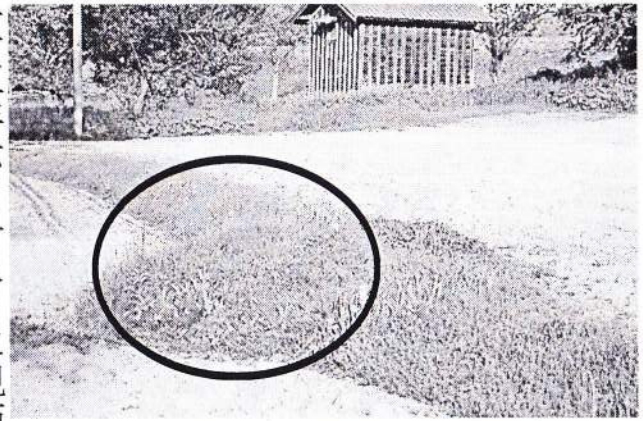
「階上村誌」小野寺菊治氏・編、小野寺正氏・復刻
三十周年記念事業名誉委員長・熊谷勝氏の談

いつの時代、どこの国でも物質的な最高価値は金に落ち着く。二〇〇八年九月一五日のアメリカ発のリーマンショック以来の世界経済の冷え込み、不安定化によって金相場は信じられないくらいの高水準に達した。金相場のグラフを見ると平成十五年から平成二十四年の間に一グラム当たり千五百円から四千五百円と三倍に値段が上がっている。一九七一年のアメリカのニクソンショックによる金本位制から為替相場制になっても、やはり信じられるものは金ということであろうか。過去人類史上、富の象徴や権力者の権威をあらわすものは金製器具であった。人類はある意味で金に支配され続けている。その金の歴史が面瀬にもあった。

現面瀬地区、松岩地区、階上地区には三陸金鉱脈のベルト内にあり中世から産金が盛んであったことは周知のことである。この面瀬地区内の金取金山（岩倉金山の西端）、岩月・宝ヶ沢の産金は江戸期まで有力産金地であった。江戸期の千苅田屋敷の繁栄を支えたのも産金であったことは「新・面瀬の昔ばなし十三」で紹介した。また、平成二十五年六月十八日に現面瀬地区振興会長藤田正人氏によってもたらされた岩月



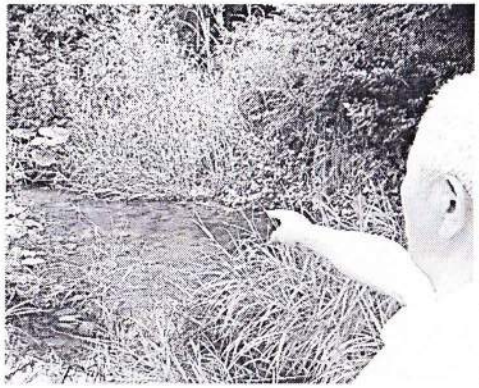
▲妙霜禅定尼の墓石▲



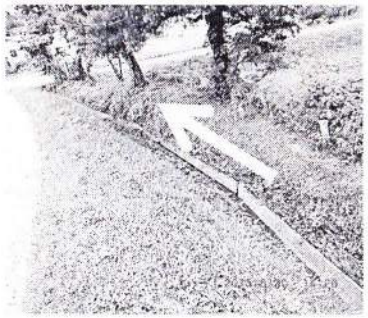
▲赤田遠藤芳治郎宅の金鉱屈跡▲

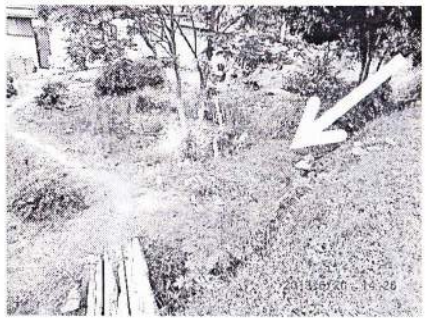
村宝ヶ沢の江戸期の金掘り職人頭領の娘の悲話のヒロインの妙霜禅定尼の墓石には江戸期寛保の年号があり江戸期の産金がわかる。

金精錬に必要な水は面瀬川中流域から取水され「大堰」となって今の青葉ヶ丘地区から基幹農道を横断して今の上沢三区を東に下り面瀬中学校（面瀬中学校立地前の「寺沢」地内でも、金鉱の空洞のため地面陥没があったという）の上を通り宝ヶ沢の精錬所に流れていた。このような史跡からも岩月の産金は江戸期の千苅田（屋号、姓；熊谷）の繁栄の基盤



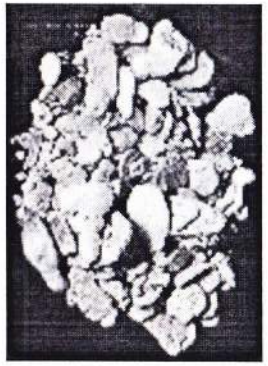
▲面瀬川「大堰」取水口▲





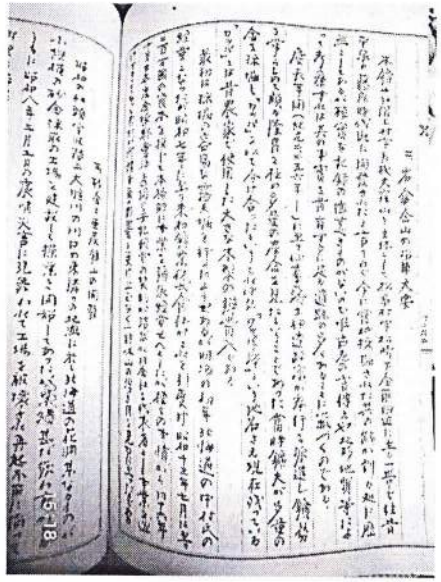
▲宝ヶ沢大堰跡　左：東へ、右：西から▲
宝ケ沢藤田武支氏宅 北裏

となったことは明らかである。江戸期以前には宝ヶ沢一帯は掘ればどこでも金がでたという。しかし、これらは幕末期には一時期廃坑となっている。その原因としては採掘方法の非効率な「露天掘り」「みよし掘り」のためであるとも言われている。当然だが金鉱脈をたどって坑道をづたいに金を含む岩石を採掘し、精錬するのが効率的である。概括的にみると面瀬の産金地は二系統あったと言えるだろう。一つは岩倉金山系の金取金山、もう一つは岩月のいたるところで産出されたところから名付けられたと思われる宝ヶ沢である。また、あえて三系統とみると三つ目は尾崎海岸、松崎村海岸に流れ込んだ砂金といえよう。これらは当然、面瀬川流域の金が流れ込んだのであり、金取金山の金、岩月宝ヶ沢系の金であると考えるのが妥当であろう。この砂金については海底に堆積しているので「海金うみきん、浜金はまきん」とも言われる。面瀬川河口の砂金は海金である。直接に目にすると「砂金」という砂状の金のイメージとは違い小さいが丸みをおびた金の塊である。



▲砂金写真▲

さてこれらの三系統の金鉱脈については、明治初年、岩倉金山は北海道の中村氏、昭和七年には東和株式鉱業会社、昭和十六年には日本産金振興会社と経営が移ったが、時局ただならぬこと（大東亜戦争突入）になり閉山となった。また、海金の採掘のために昭和初年に北海道の花渕氏が小規模の海金採掘会社を設立して産金にあたったが業績ふるわぬうちに、昭和八年三月三日の昭和大海嘯（昭和三陸大津波）により廃業した。熊谷勝先生からうかがった岩月千岩田の海岸での砂金取りの様子を幼少のころに見たというのは、きっとこの海金採掘業者が去った後も度々海金が浜に見いだされて、それを地元の人たちが個人的に採集していた姿なのかもしれない。浅学故に関係書物にさがしあてた面瀬の産金は以上であるがきっと、今後諸文献の発掘により新たな史実が見いだされることを期待する。



▲階上村誌、産金記述▲

旧千苅田（千岩田）屋敷跡を示す大井戸とおくどの井戸

おくど（台所）の井戸

庭の大井戸